

発達障害・知的障害を持つ子どもの自然体験活動を通じた育ちの保護者の実感と認知

渡部かなえ

要旨

発達障害・知的障害を持つ子どもたちの体験格差解消を目的として政府の資金援助を受けて認定NPOが行った海辺の自然体験活動のプロジェクト終了時、保護者からも継続の要望が出された。本研究は、保護者へのアンケート調査から、自然体験活動の効果と必要性および家族だけで行うことの困難を明らかにして、資金援助終了後も障害を持つ子どもたちの体験活動を行っていくにはどうしたらいいかを考えることを目的として行った。検証の結果、海辺の自然体験活動によって、豊かな感性の育ちや丈夫な体づくり、自分に自信を持つ等、多くの効果が確認された。しかし保護者だけでは安全確保が難しく、それが最大の不安であった。もし障害を持つ子どもたちの自然体験活動の介助や支援が、教育免許取得に必要な介護体験の実習として認められれば、問題解決に繋がるであろう。また持続可能性の問題は、事業団体を選ぶ際の申請書に資金援助期間の終了後の支援の継続方法を明記させ、助成終了後も持続可能かどうかを採択の重要な評価点にすることで解消していく等の方策が必要であろう。

キーワード

発達障害、知的障害、海辺の自然体験活動、保護者、持続可能性

序論

子どもたちの間で体験格差が生じており、問題となっている。特に障害を持つ子どもや生育環境に事情のある子どもは、自然体験をはじめとする体験の機会が極めて限られている。そこで、子どもたちの体験格差の解消を目的として、「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」(内閣府, 2016)¹⁾に基づき休眠預金を活用した「体験格差解消事業」が実施された。

実際の事業実施は、政府から委託を受けた資金分配団体の公募に応募して選ばれた実行団体によって行われた。

筆者らは、B&G財団(資金分配団体)が公募した、海での体験活動を通じて子どもたちの体験格差を解消し子どもたちの心身の成長を促す事業(B&G, 2020)²⁾に選ばれた実行団体の1つである神奈川県葉山で活動している認定NPOが実施した3か年(2020—2022年)の児童デイケア施設に通う発達障害・知的障害を持つ子どもたちを対象とした「みんなの海遊びプロジェクト」³⁾に参加し、保護者とデイケア施設スタッフへのアンケート調査を行った。

3か年のプロジェクト終了時、保護者からも児童デイケア施設のスタッフからも、今後も継続してほしいという要望がもたらされた。

海辺の自然体験活動を行う際に必要なことや課題は、複数子どもを同時に数人のスタッフでケアする施設⁴⁾と保護者ら家族とは異なる点も多々ある。

本研究は、保護者が実感し認知している海辺の自然体験活動の効果と必要性、および家族だけで行う

ことが困難であることを明らかにして、政府の資金援助終了で事業が終わった後、発達障害・知的障害を持つ子どもたちの海辺の自然体験を持続して行っていく、すなわち持続可能性を担保するにはどうしたらいいかを考えることを目的として行った。

方法

プロジェクト最終年度（2022年）は海での活動が夏に2回行われた（過年度：2020年度・2021年度は3回）。参加者（児童デイケア施設に通う発達障害・知的障害を持つ子どもたち）は4歳～17歳の24名・25名であった。

1日の実質的活動時間は、過年度とほぼ同じで90分（事前のライフジャケット装着や水分補給、日焼け防止対策等の準備と事後のシャワーや着替え等を含めると3時間）であった。

調査対象は子どもたちの保護者で、オープンエンド型の質問（回答者本人および子どもの属性に関する質問のみ数値回答や選択肢式）・回答は自由記述のアンケート用紙を、デイケア施設スタッフから保護者に配布してもらった。アンケート用紙の回収は、保護者からデイケア施設に提出してもらい、それをプログラム実施団体（認定NPO）経由で筆者の所属大学に郵送していただいた。データの解析は質的データ解析プログラム KH-coder⁹を用いてアンケートの回答（自由記述）の頻出語の発言頻度と語句の関係性を示す共起ネットワークを作成し、その解釈を通して行った。そして、過年度の保護者へのアンケート調査報告の結果と、最終年度の今回の結果の比較から検討を行った。

アンケート（*）の主な質問項目は

- (1) 今回の海遊びの前、どのような期待を持っていたか。（子ども達に海遊びを通して何を感じてほしいと思ったか、どんな体験をしてほしいと考えたか、など）
- (2) 海遊びの前と後で、子ども達はどんなふうに変わったと思うか。
- (3) 海遊びの体験は、子ども達にどんな影響・効果をもたらすと思うか。またそれは、いつごろ、どのような形で表れてくると思うか。
- (4) 過年度と今年を比較して、子どもたちが変わった点、変わらなかった点。（初年度（2020年）および／または2年目（2021年度）も子どもがプログラムに参加した保護者のみ）
- (5) 子どもと海に行きたいと思うか・思わないかと、その理由。
- (6) 子どもと海に行くことに不安を感じているか。
- (7) 子どもに海でやらせてあげたいこと、子どもと一緒に海でやりたいこと、子どもと海でどんな風に過ごしたいか。
- (8) （2022年度でプログラムは終了するが）今後についての要望など。

であった。（*アンケートの全質問は文末の添付資料に記載）

回答者数14名、回答率56.0%で、過半数の保護者から回答を得ることができた。

なお、この研究は神奈川大学の人を対象とする研究に関する倫理審査委員会の承認を受けており（番号2017-37）、また日本体育・スポーツ・健康学会の倫理ガイドラインを遵守して実施した。

結果

1. 保護者の期待 (図 1)

保護者が活動前に何よりも期待し願っていたのは、「海で楽しんでもほしい」であった。また、友達と遊んでもほしい（他者との交流）、普段できないボード等いろいろな体験をしてほしい、いろいろなことを感じてほしいと思っていた。さらに、プログラムに参加して楽しかったことや自然と触れ合ったことが帰宅後も楽しい思い出として心に残る。そのような期待があるから、活動前、子どもも保護者もプロジェクトに参加する日を心待ちにしていた。

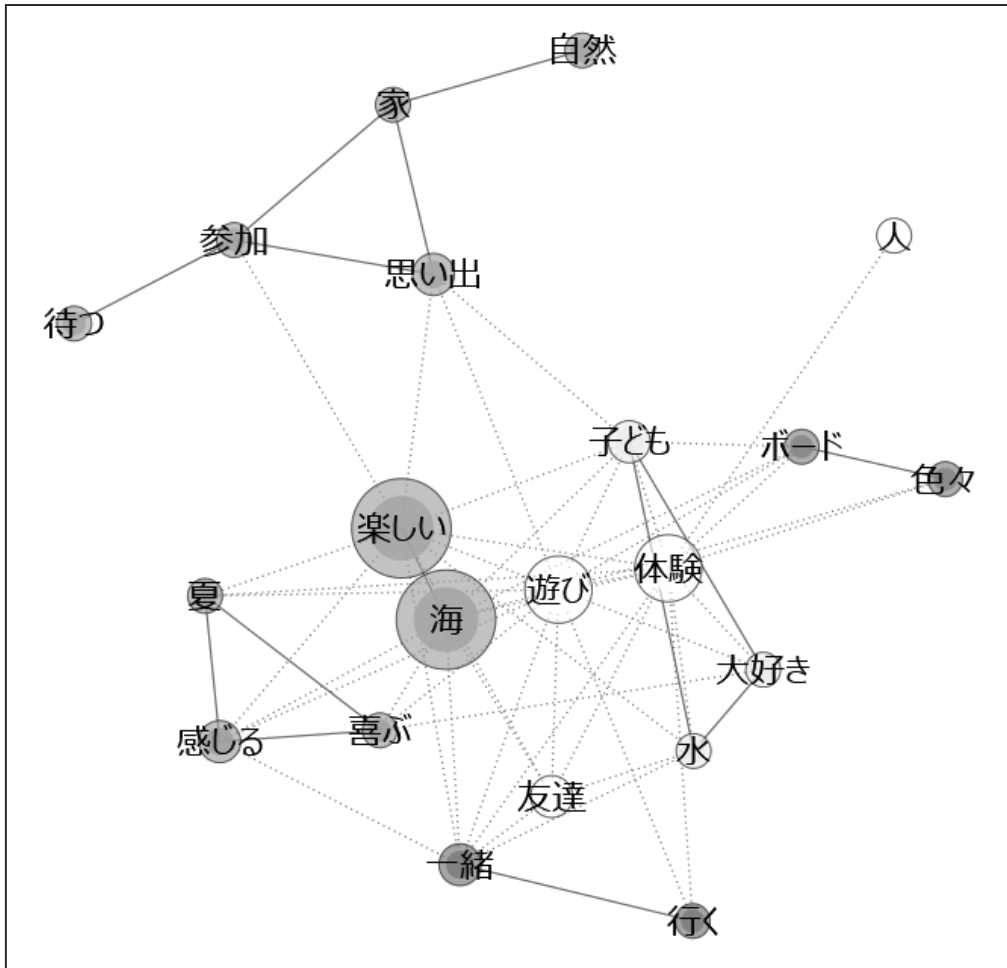


図 1：海遊びの前の期待

2. 活動参加による変化 (図 2)

活動体験後の子どもは、楽しかったことや満足したことが子どもの様子や表情などから伝わってきた。活動に参加して楽しかったことを家に帰って家族に話し、次の機会（来年以降の夏）を楽しみにするようになった。子どもは海遊びで体験したり感じたりしたことを通して、海が好きになり、言葉の表

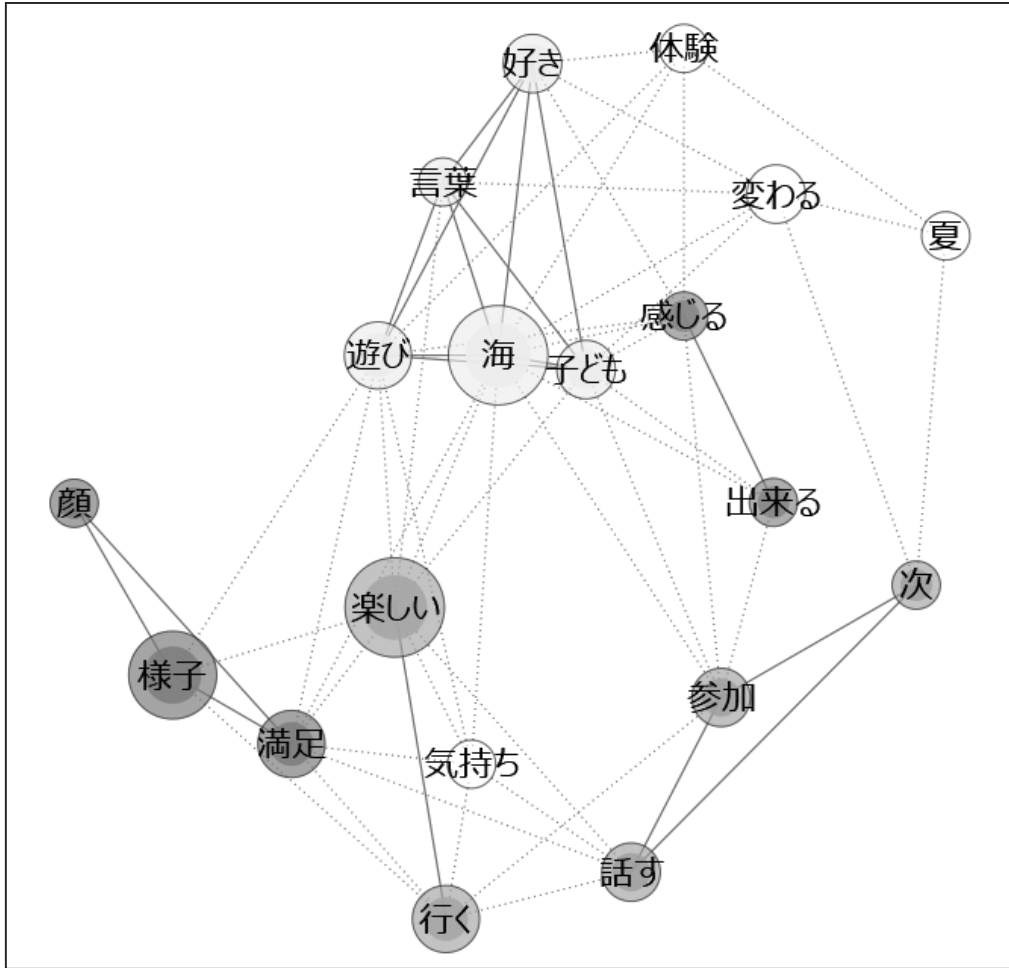


図2：活動参加による変化（過年度との比較）

現が豊かになるなど、「子どもたちが変わった」と保護者は感じ取っていた。

3. 子どもたちへの影響・効果とそれが発現する時期（図3）

保護者からは、子どもたちが海辺の自然体験プロジェクトに参加して海で様々な体験をしたことの効果は複数あげられたが、その第一は、「自分はできる」という自信を持つことができる、ということであった。体力がついて力がつき、感覚も豊かになり、心も広く大きな気持ちを持つようになること、自然を感じ、季節を意識するようになること、リラックスできて表情が豊かになることも効果としてあげられていた。さらに、記憶に残り、よい思い出となることも効果としてあげられていた。

これらの効果がいつ現れるかであるが、すぐに形となって表れるものもあれば、ずっと後になってからのものもあるし、それが発現する場も様々であると保護者は考えていた。さらに、体験活動に行った日々の積み重ねで子どもたちの力（体）も感覚（心）も大きく育っていく、と保護者が認識していることがアンケートの回答結果に表れていた。

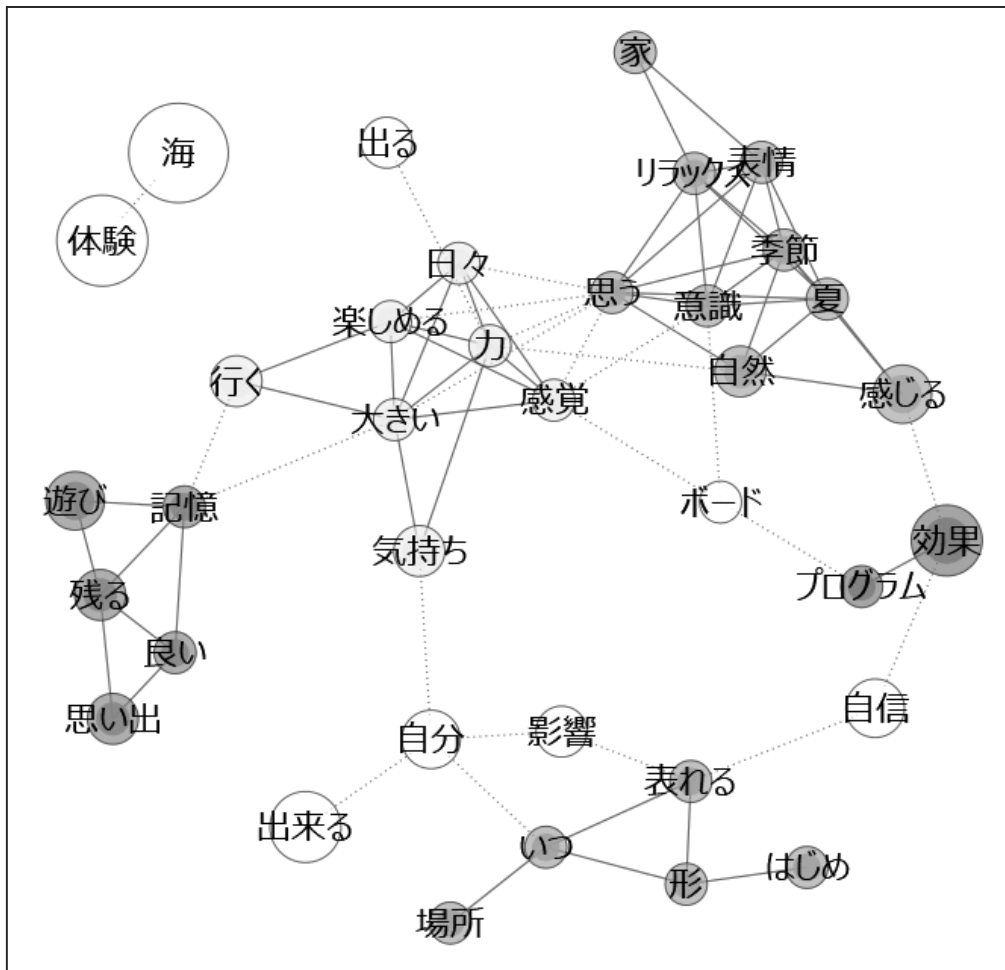


図3：影響・効果とその発現時期

4. 過年度と最終年度の比較（図4）

初参加の時には緊張したり怖がったりすることもあったと思われるが、毎回、楽しい活動をして過ごした時間に満足な気持ちになり、「楽しい」と分かるようになったので、参加の回数を重ねた最終年度（アンケートには「今年」と記載されていた）はスムーズに参加できたし、期待でワクワクしていたりする様子が見られた。海が「楽しい場所」に変わり、子どもたちも楽しみにしているので、ぜひ次年度も（毎年）やってほしいと思う、というのが活動から帰ってきた子どもたちを見て保護者が思った事であった。過年度と異なり最終年度は「次」がないので、継続して回を重ねることへの強い願いが述べられていた。

5. 子どもと海に行きたいか（図5）

家族で子どもと海に行きたいかという問いに対しては、最終年度も「行きたい」という回答が多かった。その理由は「子どものために」が共通して最も多く、二番目は「自分が子どもと一緒に海や自然を楽しみたいから」であった。「連れて行ってあげたいが、できない」という趣旨の回答は、過年度は3

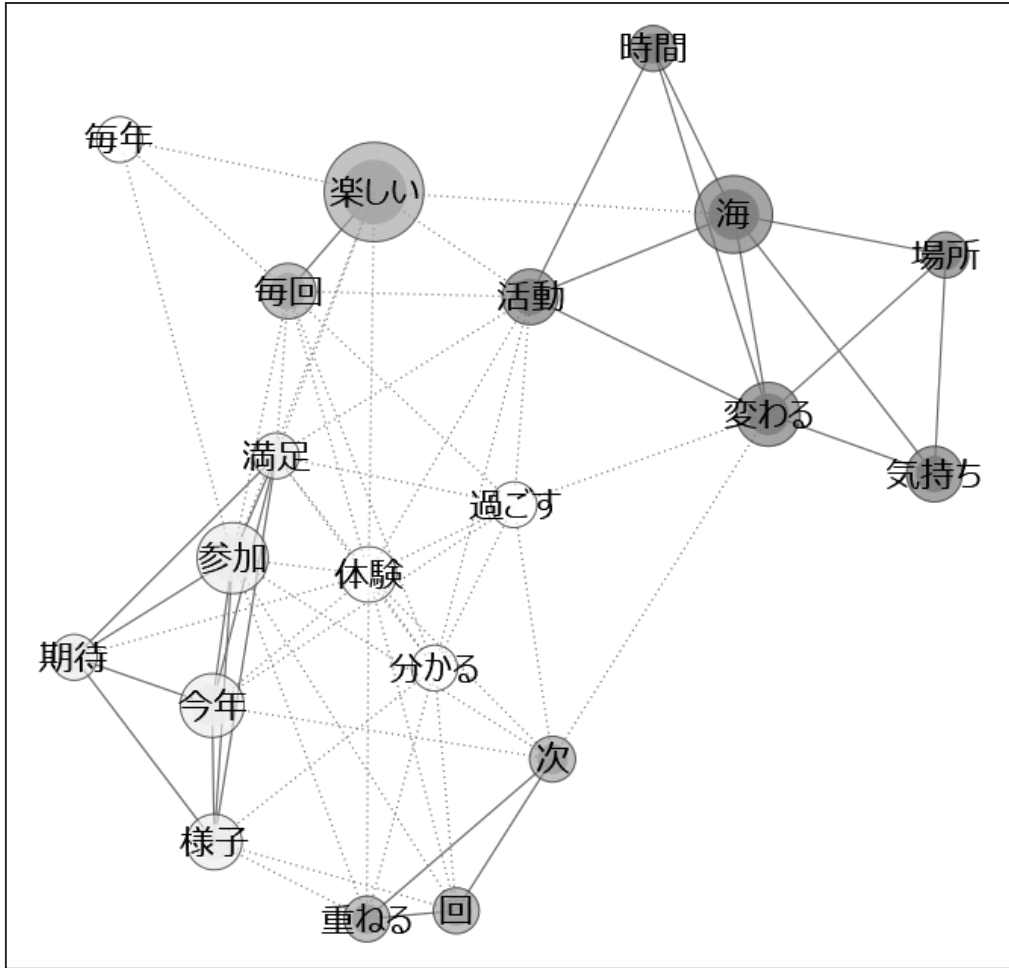


図4：過年度との比較

割弱あったが最終年度は2割に減っていた。子どもを海に連れていられない理由は、(大人の手が足りなくて)見守りができない、(親が)海に入るのが苦手、海に入るのが体力的にきつい等であった。なお、「行きたくない」という回答は最終年度には無く、逆に「(親自身は)行きたくないが、子どもが楽しそうだから(嬉しそうだから)行ってみようかと思う」という回答が1割あった。

6. 子どもと海に行くことへの不安 (図6)

子どもと海に行くことに不安を感じている保護者が少なからずいた。子どもの障害の特性から、迷子になってしまうことや、子ども本人がどこまで行ったら危険なのか知っているのか(わかっているのか)という不安、安全管理上の(怪我や事故への)心配、親自身が海に不慣れなので子どもを守れないのではないかと懸念が多かったが、他の人に迷惑をかけてしまったり、他の人を危険な目にあわせてしまうのではないかと不安を持つ保護者もいた。これらの不安を、過年度も最終年度も保護者は持っていた。

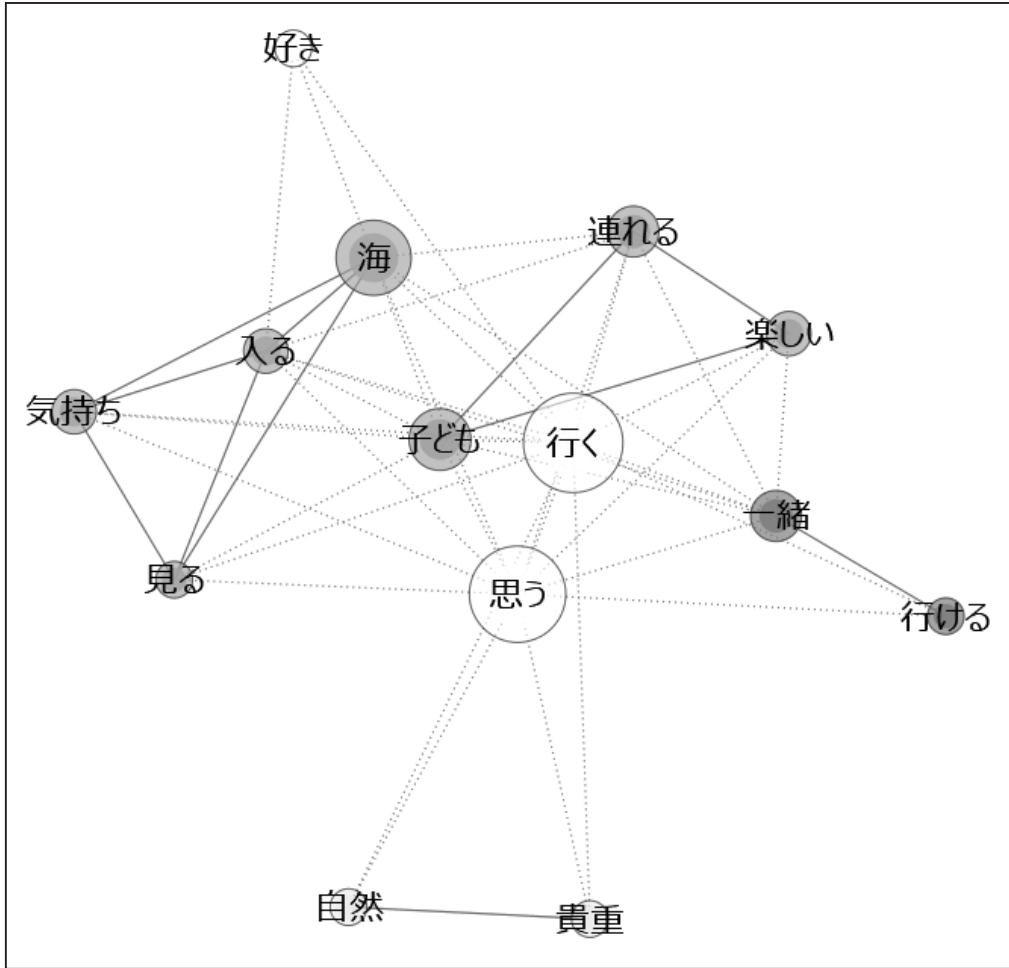


図5：子どもと海に行きたいか

7. 子どもと海でやりたいこと (図7)

子どもと海でやりたいことは、海の生き物探しや砂浜での砂遊びなど、特に道具がなくてもできるものから、シュノーケリング（アンケートには「シュノーケル」と記載されていた）やサップ、ボディボードなど、プロジェクトで子どもたちが挑戦した道具が必要なものまで、子どもたちが体験して楽しそうにしていたことを中心に保護者自身の興味関心があることや、カヌーのように子どもと一緒にやってみたい（乗ってみたい）ものがあげられていた。

8. プロジェクトが終了することと今後について (図8)

発達障害や知的障害を持つ子どもたちが楽しむことができる貴重な機会でも、子どもにとっても親にとっても夏に楽しく遊べる恒例行事になっていたのも、毎年参加してきたこの海のプロジェクトが終了してしまうことを保護者はみな残念に思い、来年もそれ以降もぜひ続けてほしいと希望していた。海で安全に活動できるので家族も安心でき、人とのつながりをもつことや様々な体験ができたことを嬉しく思い感謝していた。そして再開を強く期待しているとのことであった。

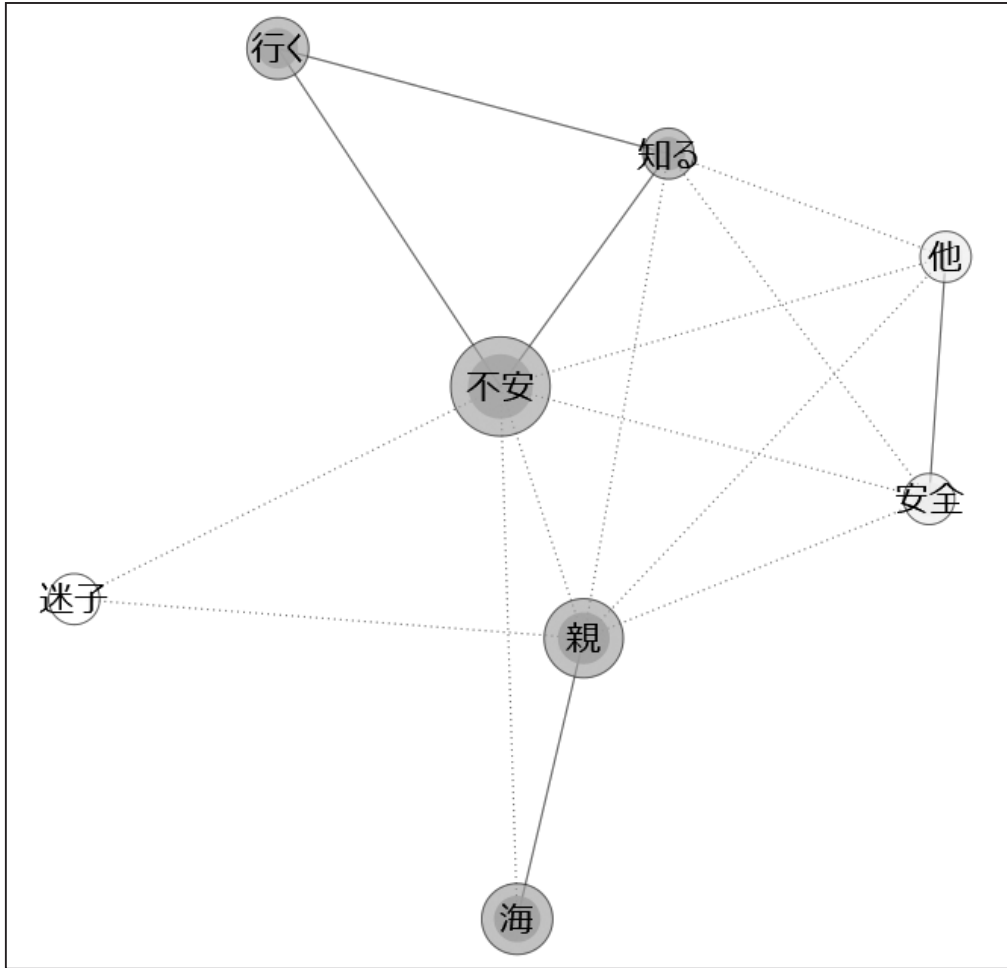


図6：子どもと海に行くことへの不安

議論

プロジェクトに参加するにあたって保護者が一番期待していたことは、過年度も最終年度も変わらず「子どもたちに楽しんでほしい」というものであった。

活動参加の後は、過年度も最終年度も、子どもたちが楽しい体験をしたということが保護者に伝わっていたが、最終年度には保護者は子どもたちが「変わった（変化）」と認知しており、この点が過年度と違っていた。

自然体験の効果として、過年度も最終年度も、自分に自信が持てるようになる、感性が豊かになる、体力がついて体が丈夫になる等、様々なことがあげられていた。そしてそれらの効果が発現する時期は、子どもによって様々であり、同じ子どもでも、どの効果がいつどんな場面で発現するかも様々であると保護者は考えている点も、過年度も最終年度も同様であった。しかし最終年度には、回を重ねることですらに効果が高まるのが実感され認知されて、体験を通した学びの積み重ねの重要性が再認識さ

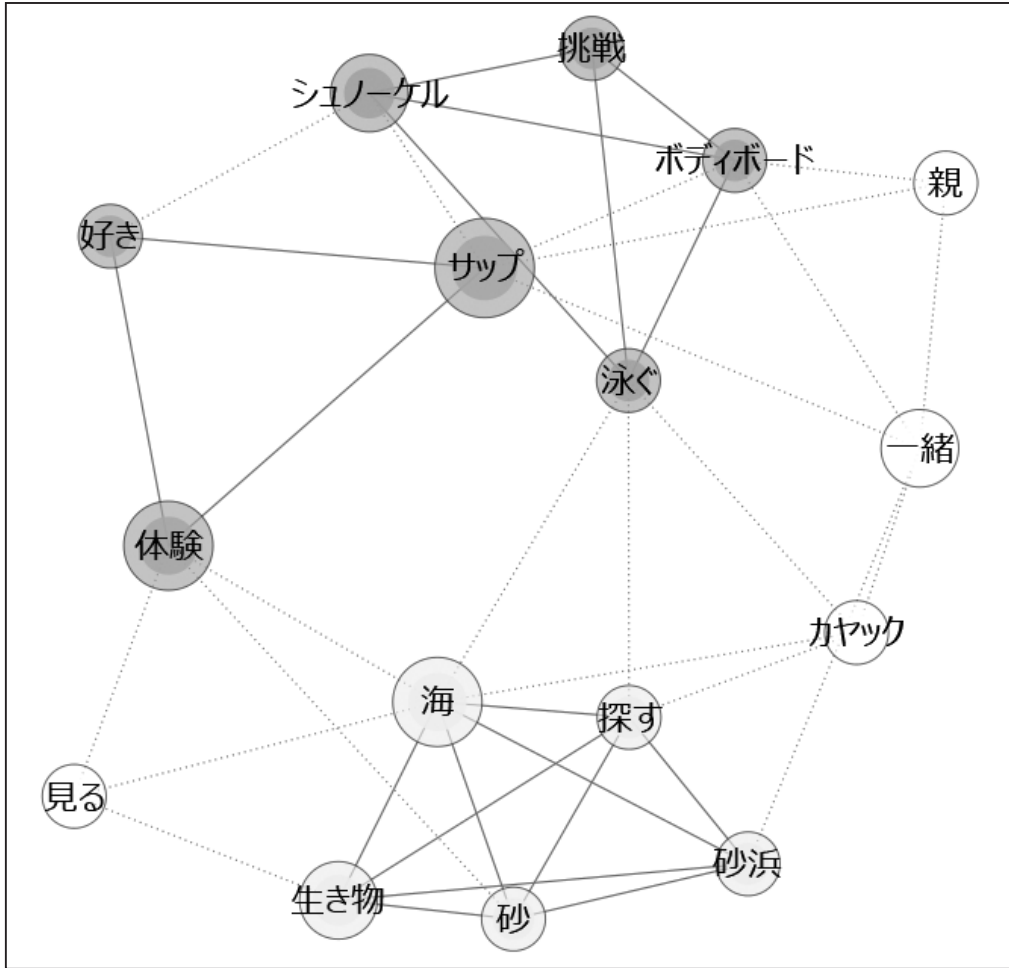


図7：子どもと海でやりたいこと

れた。

多くの保護者が、過年度も最終年度も、子どもと一緒に海に行きたいと考えていて、その理由は子どものためというのが最も多かった。また過年度は「行きたくない」という回答があったが、最終年度には「(親自身は) 行きたくないが、子どもが楽しそうだから (嬉しそうだから) 行ってみようかと思う」という回答に変わっており、子どもたちの海辺の自然体験活動への参加は親の気持ちや行動にも変化をもたらしていた。「連れて行ってあげたいができない」という回答は、過年度は約3割、最終年度は2割程度あり、その原因・理由としては安全確保への不安が大きかった。広い海辺で、親一人で障害を持つ子どもと多くの場合はその兄弟をのびのびと遊ばせながら迷子やケガや事故を完全に防ぐことは難しい。複数の保護者が協力して子どもたちをグループでケアしながら遊ばせることができる仕組み作りや、その複数の家族と障害を持つ子どもを含む子どもたちの海遊びの活動に自然体験活動のトレーニングを受けたボランティアの支援を得られる体制づくりが必要であろう。教員免許取得の必修単位に介護体験があり、施設などでの実習が義務づけられているが、その実習の範囲を広げて、障害を持つ子どもたちの海や山などのフィールドでの自然体験活動の介助や支援も介護体験として認めることができ

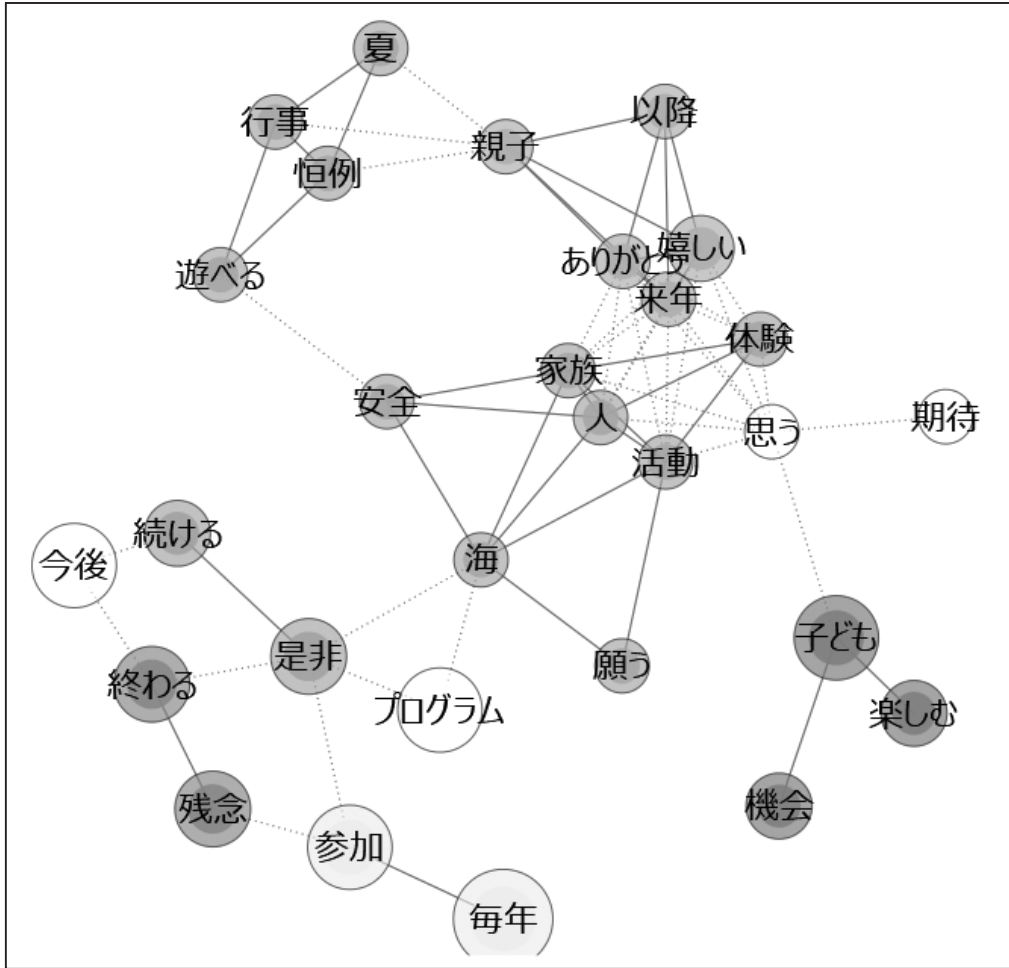


図8：プロジェクト終了後の今後について

ば、実習施設の不足を補うこともできて、両方に大きなメリットがあると期待される。

また、政府からの資金分配の終了でプロジェクトが終了してしまいプログラムが続けられないことを保護者は残念がっており、来年も参加することを楽しみにしている子どもたちがかわいそうであるが、対象が高齢者であれ、子どもであれ、疾病や障害を持つ人であれ、貧困家庭や災害被害者であれ、多くの支援・福祉事業が資金援助期間の終了とともに終わってしまい、持続可能性の担保が大きな問題となっている。事業団体を選ぶ際の申請書には、活動内容だけでなく、資金援助期間の終了後にどうやって支援を維持していくのかを明記させ、その持続可能性を採択の際の重要な評価ポイントにするなどの工夫が必要であろう。

謝辞

この研究はJSPS 科研費 23K02319 の助成を受けてまとめることができました。またデータの入力作業で墨田雪香さん（神奈川大学）にご協力いただきました。

参考文献

- 1) 内閣府 (2016), 民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律, (閲覧: 2023年11月14日), https://www5.cao.go.jp/kyumin_yokin/law/law_index.html
- 2) B&G 財団, 休眠預金等を活用した体験格差解消事業, (閲覧: 2023年11月14日), <https://www.bgf.or.jp/kyuminyokin/index.html>.
- 3) 認定NPO法人オーシャンファミリー (2020), 【休眠預金】実行団体に選ばれました! <https://oceanfamily.jp/2020/07/41499> (閲覧: 2023年11月14日)
- 4) 渡部かなえ, 大学生が知的障害・発達障害を持つ子ども達と自然体験活動の支援を通して共に学ぶ共育, 人文研究, 210, (印刷中)。
- 5) KH Coder, <https://kncoder.net/> (閲覧: 2023年11月14日)。

【添付資料】アンケート

体験格差解消事業 アンケート (保護者用)

海遊びが子ども達の心と体のより豊かな育ちにつながっていくこと, 子どもだけでなく保護者の皆様やスタッフの方にとっても実りある機会にしていくために, 以下の質問(表裏両面)に回答をお願い致します。今年度は3か年のプログラムの最終年度となります。締め括りとして, これでお終いになってしまうのではなく, 何らかの形で今後に繋げていくためにも, アンケートへの協力をよろしくお願い致します。

認定NPO法人オーシャンファミリー&渡部かなえ(神奈川大学)

1. あなたのお子さん 年齢(歳), または(小・中・高校 年生), 性別(男・女)
2. 今回の海遊びの前, どのような期待をお持ちでしたか。(子どもたちに海遊びを通して何を感じてほしいと思ったか, どんな体験をしてほしいと考えたか, など)
3. 今日海遊びを経験し終えて帰宅した子どもたちについて, 感じたこと, 考えたことを書いてください。
4. 海遊びの前と後で, 子どもたちはどんなふうに変わったと思いますか。上記の回答と内容が重複しても構いません, 特に変わらなかったと思う場合は, そう書いてください。
5. 海遊びのプロジェクトでの体験は子どもたちにどんな影響・効果をもたらすと思いますか。またそれは, いつごろ, どのような形で表れてくると思いますか。
6. 初年度(2020年)および/または2年目(2021年度)も, お子さんがプロジェクトに参加した方にお伺いします。過年度と今を比較して, 子どもたちが変わった点, 変わらなかった点を教えてください。
7. 子どもと海に行きたいと思いますか, 思いませんか。また, そう思う理由を書いて下さい。
8. 子どもと海に行くことに, 不安や戸惑いを感じている方, どんな不安や戸惑いがありますか。
9. 子どもたちに海でやらせてあげたいこと, 子どもたちと一緒に海でやりたいこと, 子どもたちと海でどんな風に過ごしたいかを書いてください。
10. 今年は3年間のプロジェクトの最終年度になりますが, 今後について, 期待することや要望などがありましたらお書きください。
11. その他, 何でも。

ありがとうございました。

注: 「プログラム」を「プロジェクト」に訂正

Parents' realization and recognition of the growth of children with developmental and mental disabilities through nature activities

Watanabe Kanae

要旨：

At the end of the ocean nature experience program, which was run by a certified NPO with government funding and, aimed at eliminating disparities in the experiences of children with developmental and intellectual disabilities parents also requested its continuation. Through a questionnaire survey of parents, this study clarified the effectiveness and necessity of nature experience activities, as well as the difficulty of doing them alone by families, and aimed at continuing to provide experience activities for children with disabilities even after funding ends. As results, we confirmed that experiencing nature activities by the sea has many effects, such as developing sensitivity, building a strong body, and gaining self-confidence. However, it was difficult for parents to ensure safety, which was the biggest concern. If assistance and support for nature experience activities for children with disabilities were recognized as the nursing experience training required to obtain a teaching license, this would lead to a solution to the problem. Furthermore, the issue of sustainability will be resolved by requiring the application form used when selecting a business organization to specify how support will be continued after the end of the financial support period, and by making sustainability an important evaluation point for selection.

キーワード：

developmental disabilities, mentally disabilities, ocean nature experiences, parents, sustainability